

## ブロイラーの産肉能力検定

徳満 茂・森本義雄・石山英光 (福岡県農業総合試験場)

Shigeru TOKUMITSU, Yoshio MORIMOTO and Hidemitsu ISHIYAMA : Comparing Performance in Random Sample Broiler Test

福岡県内におけるブロイラー銘柄のシェアは、1984年に実施したブロイラー飼養農家実態調査では、ニュー富士65%、ハバード22%、チャンキー、ピーターソン、コップが各々4%であるが、このシェアは固定したのではなく、年々有利性を求めて変化している。そこで、ブロイラー飼養農家の銘柄選定の指針とするために、1967年から産肉能力経済検定を実施しているが、今回は、1981年から1986年までの6年間のうちの1983年を除いた5年間の検定結果について報告する。

## 1. 試験方法

1) 検定銘柄 県内で飼養されているニュー富士、ハバード、チャンキー、ピーターソン、コップ及び今後の導入が予想されるインディアンリバー、ノーリン502の7銘柄とした。農林水産省作出のノーリン502以外はすべて外国鶏である。

2) 検定期間 1981年・1982年・1984年は10月から12月、1985年・1986年は4月から6月とし、検定日数は各年度とも63日間とした。

3) 検定雌 各銘柄の種卵220個を當場にてふ化し、正常雌について雌雄鑑別した後、雄70羽、雌70羽を検定に使用した。

4) 飼料 くみあい配合飼料を使用し、1981年から1985年は2段切り替え、1986年は3段切り替えとした。

5) 鶏舎及び飼養方法 開放平飼い鶏舎で雌雄別飼いとし、3.3m<sup>2</sup>当たり雄33羽、雌42羽を収容した。育雛期間の給温は給温方式の床面給温及び赤外線電球を併用し、敷料はおが屑を使用した。飼料及び飲水は自由摂取とした。

## 2. 結果及び考察

育成成績の経年変化には一定の傾向は認められなかった。各銘柄の餌付けから9週齢までの雄雌平均育成成績の5年間の平均値を第1表に示した。

1) 育成率 全銘柄の平均育成率は95%で優れていた。ハバード、インディアンリバー、コップが平均育成率に比べてやや劣っていたが、銘柄間差はわずかであった。死亡原因は、各銘柄とも呼吸器病、脚弱症、腹水症が多かったが、これらは各銘柄に平均してみられ、全死亡羽数の約25%を占めた。特に、腹水症は1984年以降発生し、全死亡羽数の約10%を占めた。

2) 体重 外国鶏銘柄の9週齢時平均体重は2.96kgで、コップが3.11kgとやや重かった以外は銘柄間差はわずかであった。ノーリン502は2.73kgで外国鶏銘柄に比べて約200から400g軽かった。

3) 飼料要求率 全銘柄の平均飼料要求率は2.30で、銘柄間差は0.03とわずかであった。

4) 生産指数 外国鶏銘柄の平均生産指数は195で、銘柄間差は10とわずかであった。ノーリン502は体重が軽かったため180で外国鶏銘柄に比べて約15劣った。

5) 解体成績 全銘柄の9週齢時平均解体成績は中抜きI型84%、むね肉16%、もも肉21%、ささみ4%、腹部脂肪3.5%及び、むね肉、もも肉、ささみを合計した正肉割合は40%となり、銘柄間差はわずかであった。

以上の結果をまとめると、今回取り上げた銘柄については、体重が軽かったノーリン502を除くとその産肉能力に大きな差はなく、また、経年的な一定の傾向も認められなかった。

第1表 育成成績

銘柄	育成率	体重	飼料要求率	生産指数	中抜きI型	むね肉	もも肉	腹部脂肪	正肉割合
	%	kg			%	%	%	%	%
ニュー富士	96	2.96	2.30	197	83	15	21	3.7	40
チャンキー	95	2.94	2.29	195	84	16	21	3.5	40
ハバード	94	2.95	2.32	191	84	16	21	3.4	40
インディアンリバー	93	2.96	2.29	192	83	15	21	3.8	39
ピーターソン	96	2.95	2.30	197	85	16	21	3.2	40
コップ	94	3.11	2.31	202	85	16	21	3.4	41
ノーリン502	95	2.73	2.30	180	83	15	21	3.6	39

注) ①中抜きI型、むね肉、もも肉、腹部脂肪及び正肉割合は生体重に対する割合。